

10

森祐晴と泊雲塾

飯塚 修三

西宮市

2016年12月8日、NHKで「ファミリーヒストリー：倉本聰」が放送された。その1か月前、NHK制作部より「森祐晴」について私に問い合わせがあった。10年前に眼科雑誌「日本の眼科」（日本眼科医会発行）に『森祐晴と泊雲塾』という題名で投稿したことがある。

森祐晴は、倉本聰（本名：山谷馨）の母方の祖父・浅井貞吉を佐渡島から京都に呼び寄せた医者である。放送では浅井貞吉の孫が出演して祖父の思い出を語っていた。

私の母校である大阪大学医学部は緒方洪庵の適塾をその源流とする。適塾生・黒田翹廬きくろを調べていたら、その思想上の孫弟子にあたる眼科医、森祐晴が京都の自宅で泊雲塾という家塾を開いていたことが分かった。

適塾より泊雲塾に繋がる学系をあらわすと次のようになる。

緒方洪庵（適塾、1810～1863、大坂）→黒田翹廬（達通館、1828～1892、膳所）→杉浦重剛（称好塾、1855～1924、東京）→森祐晴（泊雲塾、1863～1921、京都）

黒田翹廬

1843年（文政10）、翹廬は近江膳所藩校・遵義堂頭取、黒田扶善じゅんぎどうの次男として生まれた。酒をよく好み翹廬きくろ（翹はコウジカビ、廬はイオリ）と号した。1843年（天保14）、17歳の翹廬は父に命じられ、緒方洪庵の適塾に入門し2年間学んだ。「適々斎塾姓名録」の第28番目であった。その後、翹廬は大坂の藤沢東暎に、次に京都の岩垣月洲に儒学を学んだ。その後、江戸に遊学に出た翹廬は朱子学あさかこんを安積長斎さいに、蘭学を伊東玄朴げんぼくに学んでいる。この頃、蘭訳された「ロビンソン・クルーソー漂流記」を和訳して「漂荒紀事」と題して発表した。

森祐晴

下京区御幸町松原下の西側、私立森眼科病院。京都医会会員で明治29年4月18日、森病院を開設、当日は多くの知名人を招いて盛大な開院式を行った。明治35年京都での医事統計に私立森眼科病院の患者1690人が記されているという。非常に盛業であった。生没年は、明治13年森祐晴が杉浦重剛門下になったのが18歳であったことを逆算すると、生年は文久3年（1863）と推察される。また没年は大正10年（1921）である。これらの資料は参考文献2、3の水原完たもつによる。森祐晴は水原完（妹の孫）の大叔父にあたる。

森祐晴を知るにはその父、森祐信を語る必要がある。森祐信は黒田翹廬いんとこの従兄弟であり、藩校・遵義堂の教授であった。

1996年（明治29）医師になった祐晴は京都御幸町にあった宿屋を買い取り、眼科病院を開院した。

この病院に泊雲塾と称して、塾生を集めて面倒をみた。塾生は数人で部屋をもらい、昼間は各人の学校に通い、夜には塾に戻り勉学に励んだ。今でいう下宿、学習塾と実地修練所を兼ね備えた家塾である。

塾生には駒井徳三・初代満州国総務長官（総理）、憲法学者、佐々木惣一などがいる。医家では杉浦重剛の甥で後の京都北山病院長・萩章、祐晴の甥で後の大阪桃山病院副病院長・水原廣がいる。

その他の医者では滋賀の佐倉了八、近松忠雄、中井利一郎、大原鉄治、磯田源次郎、井上三郎助、京都の河瀬泰、中村栄太郎、大阪の大嶋知量、山口の佐々木庄太郎、森重長之進、佐賀の片田江俊定、洲本の吉田孝一など西日本に散らばっている。（文中敬称略）

参考文献

1. 日本眼科学会「日本眼科学会百周年記念誌、第5巻、日本眼科を支えた明治の人々」思文閣出版、1997年
2. 水原完「明治期の京都泊雲塾」日本医事新報、2855、1979年
3. 水原完「適塾門下生の近江膳所での流れ」日本医事新報、2892、1979年
4. 飯塚修三「森祐晴と泊雲塾」日本の眼科77、2006年12月